現職参加教員の帰国後の役割を探る

西尾　直美
（16-1，ドミニカ共和国，小学校教諭，茨城県守谷市立愛宕中学校）

はじめに

任国で常に私が思いを馳せていたこと…それは「日本の教育」である。協力隊員としての活動に没頭すればするほど、私は日本の教育を受けてきた者であって、日本の教師なのだと痛感するのである。私はドミニカ共和国で小学校に赴任し、算数の授業の立て直し主な活動としてきた。日本の算数の検定用教科書が、こんなに緻密で精巧で、すべて計算され尽くした「作品」だと、ドミニカ共和国に赴任するまで教師を続けている間、ここまで感動したことはなかった。一方、日本の教育での問題点に対して、自分の中に赴任前とは違った視点が生まれた。日本の学校現場で日々時間に追われて仕事に没頭していたときは、そんなことを考える余裕はなく馬車馬のごとく体と神経をフル稼働させていただけだった。

これから現職参加制度を用いて協力隊に参加されようと考えている教職員の方々に、私は「プラスになることしか存在しない」と断言したい。帰国後、また出逢う日本の子ども達へ、職場の同僚へ、先生方と出会いすべての人々にとってもプラスであり、そして何より、協力隊員として活躍した先生方自身に一番プラスになっているからである。

この思いを込めて、私が帰国後に行ってきている活動を紹介し、今後の現職参加教員の役割について述べていくことにする。

１　日本の子ども達のための役割

（１）　学習する価値を見いだせない子ども達へ

日本の学校教育の中で、学習についていけず自らを落ちこぼれと認識している生徒に学習に対する意欲を高めさせることは至難の業である。落ちこぼれのレッテルを貼られ、そして最も不幸なのは生徒自ら自分に自信をもって生きることを放棄してしまっているのである。

そのようないわゆる「落ちこぼれ」生徒に対して私の接し方は変わった。日本国内、日本の学校教育の中だけではなく、同じ世代の地球人として彼らを見ると「すばらしい力と才能を秘めている」ことを実感できる人間に見えるのである。日本人として生まれてきて日本の教育を受けている生徒達は「みな、すごいのだ」と本心を述べると、落ちこぼれ達も「自分たちも、そんなに悪くないのかも」とはにかみながら、私との会話を終える。

協力隊派遣以前は、彼らとこのような会話はあり得なかった。関わっている日本の生徒感も私自身変わった。

（２）　国際理解教育

日本の学校教育で国際理解教育が盛んになりはじめて久しい時間が経つ。協力隊ＯＢのその舞台で数々の貴重な経験を話すことも多いだろう。しかし、私が懸念しているのは、他国の生活の様子を学んでも、国際理解教育が求める本質には届かないのである。いろいろな国の事情を知ることではなく、最終的に「いろいろな国があって、いろいろな人がいるんだな」と子どもが感じることができることが大切であると考える。ＪＩＣＡが行っている出前出張講座は、できるだけ隊員ＯＢ複数で行うほうが、「いろいろある」という事実は伝えやすいだろう。

①　「途上国は、かわいそう」

私が国際理解教育を行う上での最大の目標は、生徒達にいかに「途上国は、かわいそう」という固定概念を崩させるかである。私たち隊員ＯＢは、途上国はかわいそうなだけではないということを、身をもって経験してきた。むしろ、日本が今必要としているものを途上国ではひたむきに守って大切にしていたりする。先進国も途上国もない。お互い力を出し合って、しあわせになるために生きていきたいという姿勢を伝えていきたいと考えている。

②　援助は、相手が必要としているものを

途上国の話をすると、学校（教師や生徒、保護者も含めて）は何か自分たちにできることはないか、子ども達に何かさせたい＝ボランティア活動という順序をたどる。実際に大きな援助団体が募っているものを集めて寄付活動をするが、この場合、生徒達は実際に自分たちが寄付したものが実際にどこに送られ、誰の手に渡っているのか知ることはない。つまり、本当に役に立ったという実感が得られないのである。

私は、援助をした側とされた側がつながってはじめて、実際の援助と鳴戸思っている。その経験を生徒にして欲しかったので、勤務する中学校で集めた文房具を、この冬休みにドミニカ共和国で活動していた小学校の教師に届けに行った。そして、生徒達にその様子を伝える予定である。

寄付する文房具（鉛筆・消しゴムなど）を集めていたとき、もはや使い物にならない鉛筆を多数持ってきた生徒がいた。今後の国際理解教育での授業の大きなポイントとなる。

援助は、私たちの不要なものを捨てることではないのである。途上国の人々は、私たちが使い物にならないものでも、喜ぶと思っているのか？相手のことを考えた援助を私たちはしなければならないはずである。

③　進路指導・キャリア教育

中学校教育の大きな柱として、進路指導・キャリア教育という分野がある。中学２年では、事業所の協力を得て職業体験学習も行われる。世の中にはどのような仕事があって、どのように人々は社会貢献をしているのかを学び、自分の進路の参考にする学習である。

私たち教職員はとても見識がせまく、どのような職業がありどのような流れでその職

に就くことができるのか、どのような資質が必要とされているのかなど、全く知らない。

そのような中、私は訓練時から派遣中もさまざまな職種で熟練した協力隊員の仲間たちというのは、この進路指導において生徒達にたくさんの可能性を示してくれる貴重な教材となっている。そして、今中学生がやるべきこととして「自分が自信をもってがんばれること、自分じゃないとできないことを一生懸命やっておくこと」をこの協力隊員が伝えていることを生徒に話すと、とても説得力がある中味の濃い授業を展開することができる。

２　地域社会へ

私は、茨城県守谷市の国際交流協会（ＭＩＦＡ）の一員として、開発教育ワーキンググループに所属している。これから多国籍の人々と生活を共にする社会に、自分たちの価値観や感覚を「共生」できるりょうに磨かなければならないと熱心に勉強している集団である。

あるグループの老人が「子ども達は学校で共生について勉強している。でも私たち大人は、勉強する場がない。だからここで、みんなで勉強しなくてはならない」と言った。

子ども達が学校で国際理解教育を勉強しても、子ども達をとりまく社会が共生できる社会として成立していなければ、学習したことは意味が無くなってしまう。彼らと勉強し合いながら、共生することができる社会を実現することも、協力隊ＯＢとして、教育と地域を結びつける現職参加教員としての役目だと認識している。

３　日本の教育界へ

（１）　プロモーション活動の積極化を

私が帰国してから、仕事仲間からの連絡が多くなった。現職参加制度に関する質問である。質問の内容は、職種の内容だったり、制度の中味だったりする。

一般募集を対象にした説明会等は、協力隊を育てる会などが中心となって各地で行われているが、現職参加のそれはほとんどない。私たちＯＢがもっと積極的にプロモーション活動をしてもよいのではないかと思っている。私は、現職参加をさせてもらった教員は、さまざまな形で経験を還元しなければならないと考えている。それは、学校現場に限ったことではなく、現職参加制度を利用する後輩教師を多く輩出することに尽力することも、その還元の１つだと思う。

（２）　今後、学校現場には日本語を母語としない子ども達、あるいは保護者が増加することは明らかである。そのような状況に対応しやすいのは私たち現職参加ＯＢだと思う。赴任していた国を言語が通じれば、その言語を必要としている子どもの学習効果も倍増するに違いない。協力隊派遣国は他国に渡っているため、多数の国の外国人児童のために力になれる可能性も大きいのではないだろうか。

（３）　本邦研修にくる研修生の手伝い

教育関係で日本に研修にくる派遣国の人を日本の学校現場での実習をしても面白いのではないかと思う。実際に、私のカウンターパートは春に私の勤務先の近く（つくば市）で

研修を受けていた。私はそのことを知らされずに彼らは帰国してしまったが、帰国後の現職参加ＯＢをうまく利用して、日本の学校現場の実習場所としても利用することは可能だと思う。また、学校にも、国際理解教育の観点からもメリットは大きいであろう。

（４）　日本の教育について意見を発信する教師として（現職参加ＯＢ「チーム」として）

日本の教師の中で、他の国の学校の現場を経験している教師は、はたしてどれだけ存在するであろうか。在外派遣教員（いわゆる日本人学校）は、外国での生活経験はあるけれども、外国での学校現場は知らない。日本の学校教育・日本の教育について他国の教育との違いを経験として比較できるのは、私たち現職参加ＯＢだけではないだろうか。

その存在価値は、とても貴重なものだと私は考えている。なぜなら、私たちは、日本の教育のすばらしさ、日本の教育の問題点がこの貴重な経験で実感しているからである。さらに言えば、日本の教育が今日抱えている問題について、具体的に行えばよい策も提示できるアイデアを持っている。

私が帰国して驚いたことは、日本という国全体が、今の日本の教育に危機感を抱き教育に関して意見を述べる人々が増えたということである。しかし、依然として、学校現場で働く教師（管理職ではなく、実際に子ども達と接している教師）の声は、巷に届いていない。

私も含めて個人的に私見を述べても無意味なものなのである。しかし、現職参加ＯＢが現場で日本の子ども達と接して働いている教師として、日本の教育のすばらしさ、問題点を周知させることができれば、私たちの経験が日本の教育に還元される大きな意味をなすはずである。そのような団体として現職参加ＯＢが存在する日がくることが、今の私の夢である。

おわりに

援助はお金やモノではない、援助を必要としている人々へ、「人」が助けにいってあげることであると、私は実感した。そして援助活動は、人助けではない。自分が大きく成長させてもらうことだと。援助をしにいったはずの自分が、気が付いたら大切なことを学ばせてもらっていた。途上国で生活する人々から、日本にとっても大切なもの教えられた。教師も、常に何かを学び続けなければならない。そして、現職参加制度による青年海外協力隊は、日本では決して学ぶことはできないことを学ぶことができる貴重な機会だと思う。

最後に、私がドミニカ共和国の親友から常に言われ、今日本に教師としての座右の銘になっている言葉を記して締めくくることにする。

私たちは貧しいけれど、
日本にはない大切なものをもってる。
それは

たくさんの愛。

もっと純粋に、思いを込めて
子どもたちを愛してあげないといけません。
それが
日本に足りないものだと思います。